教会会報
川畔の尖塔
日本キリスト教団札幌教会

「恐れるな」

牧師　米倉　美佐男

ヨハネの黙示録一章九～二〇節

「恐れるな。わたしは最初の者にして最後の者、また生きている者である。一度は死んだが、見よ、世々限りなく生きて、死と陰府の鍵を持っている。」（一七、一八節）

主の復活の日の朝、からの墓の前でみ使いが伝えたのは、主イエスは死人の中からよみがえられ、あなたがたより先にガリラヤへ行かれそこで主にお会いできるということでした。復活の主と出会い、伝道者として召されたパウロも次のように告白します。**「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと」（コリントⅠ一五章三、四節）。**これが最古の信仰告白です。私たちもこの時代の中で教会の伝えて来た信仰を継承し、主イエス・キリストに救われた者として大胆に復活の主を証したいと思います。

ヨハネの黙示録の時代は一世紀末の時代、ローマ帝国による教会への迫害弾圧が厳しく、信仰を公にしにくい時代でありました。信仰を持つことが命がけの時代だったのです。信仰者たちの厳しい状況の中で、黙示録の著者は次のように時代分析をしています。「今の時代は悪そのものであり、サタンの力に支配されていますが、やがて滅びる時代です。その先には新しく来る時代、新しい天と地が出現します。われわれはその時を、希望を失わずに待つのです。終末の時を見つめながら主に生かされることが最大の関心事です。」

一番大切なことは主イエスを正しく知ることです。主イエスは誠実な証人、死者の中から最初に復活した方（プロトコス）、地上の王たちの支配者です。主はサタンの誘惑に負けず妥協せず、神に従順で十字架と復活の力によって、死に勝利なさったのです。主はご自身の血によって私たちの罪を贖って下さいました。

ヨハネが見た第一の幻は主イエスが大祭司として来られたことでした。この主を信じ従うことが信仰者を生かすのです。「恐れるな」は弟子たちが何度も主イエスから聞いていた言葉です。私たちが死に至るまで信仰者として歩む時、主イエスは共におられるのです。

私たちは、死を滅ぼし死に勝利された復活の主によって神の民とされ、永遠の生命を与えられ、福音によって生きるのです。黙示録の時代も現代も、イエスに対する信仰を疎外する力が外からも内側からも働いています。

私たちは生きて働く神を信じます。主のみ声を聞き、復活の主を伝えます。今も主が共にいて下さるからです。

イースターに寄せて

イースターエッグ

村田　陽子

六、七歳の頃だったと思います。大きな川にかかる長い橋を渡って、子供達四、五人で町の中心にある教会まで歩いて出かけました。誰かが聞いたのでしょう。そこへ行けばゆで玉子がもらえるというのです。

そこで子供達だけの小さな冒険をしました。初めて見るステンドグラスの明るい豊かな色彩の光と、礼拝堂一杯の美しい歌声は驚きの世界だったと思います。子供達はみんな、紙に包んだ白いゆで玉子をしっかり握りしめて家路についたのでした。戦後間もない時代の話です。イースターに寄せて何か、という事でしたので考えていましたら、突然すっかり忘れていた子供の頃の白いゆで玉子の記憶が甦ってきました。

私は、十九歳の頃の学生時代から教会が始まったと思っていましたが、実はあの子供の時の一度だけの経験が復活祭の日で、あの白いゆで玉子が、私にとって主の御心が最初に〝かたち〟になった時だと。その事に気付くのに、その後随分長い時間が必要でした。イースターがもうすぐやってきます。今年はいつもより、少し特別の日になりそうだと思っています。

賛美歌と教会音楽

高杉　香苗

イエスさまの復活をお祝いするイースターには、クリスマスとともに、古くから大切に歌われてきた賛美歌や教会音楽があります。

讃美歌21の３１６番「復活の主は」は、12世紀にまでさかのぼるドイツの宗教民謡です。典礼の中で会衆が参加して歌いました。のちにルターによって賛美歌に採用されています。３１７番「主はわが罪ゆえ」は、歌詞・旋律ともに３１６番をルターが改訂したもので、力強い、宗教改革期の代表的な復活の賛美歌です。これらは多くの音楽に用いられ、ヨハン・セバスティアン・バッハも教会カンタータやオルガン作品をのこしました。カンタータ第４番「キリストは死の縄目につながれたり」は、全曲が３１７番による、バッハ初期の名作です。

３２０番「ハレルヤ、ハレルヤ（息子よ、娘よ）」は、マルコによる福音書16章に基づく、フランスのキャロル（民謡）です。オルガンの音色を重要視したフランスでは、キャロルをテーマにした変奏曲がたくさん作られました。バッハと同じ頃、パリで活躍したジャン＝フランソワ・ダンドリューの変奏曲など、リズムや音色の変化を楽しめる作品があります。

ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデルのオラトリオ「メサイア」は、主イエスのご生涯を描いた音楽です。その中の「ハレルヤコーラス」は、「王の王、主の主」と讃える合唱で、札幌教会でもクリスマス、イースターに全員で賛美をします。ハレルヤコーラスに続くのが、「贖い主の生き給うを知る」と歌うソプラノ独唱曲です。このアリアは讃美歌第二編五五番「主イエスは死に勝ち」という賛美歌になっています。

主の十字架と復活の福音

吉峰　洋子

昭和二十二年の春、日曜学校六年生から中学科へ進むころ、牧師から大人の礼拝にも出るようにと言われました。緊張の思いで出席しました。日曜学校とは全く違う重々しい雰囲気と、説教の難しさとに威圧されました。解らないながらも私にとって礼拝は宝物のような存在になりました。それから一年後、イースターが間近なころの放課後に、突然一人の高校生が入って来て私の前に立ち「イエス・キリストとは何か」と質問しました。とっさに答えられず、長い時間が経ったとき「イエス・キリストとは、神と人との仲立ちをして下さる方です。」と答えている私がいました。私が初めて「主」を告白した大切な出来ごとでした。その時の緊張感は今でも忘れることが出来ません。その五ヶ月後に旧メソジスト岩見沢教会の田島正人牧師より洗礼を受けました。教会学校の働きがいかに大切であるかを、心に刻みたいと思います。

主が十字架による贖罪で終わるのであれば、人間は誰しも免れることができない「死」という「絶望」から逃れることは出来ません。神の大いなる恵みの故に主は「復活」によって「死」に「勝利」して下さったのです。「主の十字架と復活の福音」のみが、唯一の真実と信じます。

この与えられた恵みに応えられますように、神が一番喜ばれる「砕けたる魂」をお与え下さるように、日々祈っております。

復活

田中　満

イエスは復活したが、私達にとって復活は有り得るのだろうか、まず不可能ではないかと思う。でも何か小さなことの復活を希望しても良いのでは！

当教会も一二五年の歴史を持つまでに至って何か権威主義だけになり、形骸化している様な昨今、寂しい限りである。

教会創成期の先達の苦労、努力、信仰はいかばかりか、内村鑑三師の無教会主義に近いものではなかったろうか、ただただ頭の下がる気持ちでいっぱいです。

小生に鑑（かんが）みると、全きに無節操で、自由人であることが、自分のライフスタイルだと格好をつけている。

正月、盆には、孫達と遊び、喧嘩し、泣かせてクソ爺と逆襲され、娘達にも大人気ないと叱られる次第であります。

日々の生活の中に生を見い出し、誕生させ、成長の過程を見届ける。

今、世界は民族、宗教、領土、人種差別と様々な問題を抱えながら、病みながらも息づいて、止むことなく生きて行こうとしている。人は微かな希望の光を求めて、牧舎に辿り着き扉が大きく開かれていることを望む。中に平安があると信じて。

神の大きな愛に包まれていると、安住している自分の身勝手にも自己批判します。

タマゴをヒヨコに誕生させることが、私は復活ではないかと、そして全ての生き物を愛を持って育む。「生命の誕生」それこそすばらしい全地球、全宇宙の誕生迄も復活ではないだろうか、日々是れ神に感謝し、自分なりに精一杯生きることが、神の愛に応えることではないだろうか。

戦後七十年を越えて

手島　正浩

父がクリスチャンになった経緯は知らない。私が六歳の時、北一条東六丁目の宣教師館で、夏期学校が開かれた。碧い空、広い芝生が懐かしい。近くに札幌バンドから一人メソジスト教会に残られた佐藤男爵のお屋敷があった。戦前の正に平和な時代である。

昭和十二年に日支事変が起き、日米通商条約が破棄され、国は戦時体制に入った。

昭和十四年に宗教団体法が成立し、教会は国家の統制下に置かれ、続く十六年に太平洋戦争が勃発した。ある夜、私たち中学生が窓を暗幕で遮蔽された牧師館の書斎に集った。米国帰りの真野萬穣牧師は「アメリカには絶対勝てません」とはっきり言った。

昭和十九年私は札幌を離れた。アメリカの本土空襲が激しくなり、学生は軍需工場で働かされ、私は獣医系の学生で、援農先の日高にあった国の牧場で終戦を知った。従兄弟がフィリピン沖や沖縄で戦死し、教友もガダルカナルで餓死した。そして忌まわしい原爆投下で戦争が終わった。札幌に進駐軍がやって来た。

父の顔が戦前の姿に戻った。

今戦時中を振り返ると、そこに特筆すべき事項がある。即ち日本基督教団の設立である。時、正に愛国運動のさ中、宣教師は強制帰国させられ、後には日基の小野村林蔵牧師が、言論統制法で逮捕投獄された。

そのさ中の昭和十六年、札幌メソジスト教会は母教団と義絶して教団の組織下に入った。

長年に亘る、メソジスト母教団の厚意と支援交友を覚えつつ、一億総動員令の下、援助廃絶、自主独立を唱えて、統合のための緊急繁雑な業務遂行に当たった先輩長老諸兄の御苦労を思う時、悲愴の感を覚える。

戦後間もなく、私は母から一冊の聖書を貰った。表紙にガリラヤ湖が画かれ、中はザラ紙の新約聖書で、アメリカで印刷とある。

昭和二十二年二十五歳の時、私は八雲町で大きな宗教体験をした。突然、聖書が無条件に吸収理解され、深い感動に浸った。

終戦後、札幌では親交のあった白戸牧師を迎え、今日に至る熱心な活動が始まった。

戦後の歩みを見ると、そこに壮大な開拓伝道の大事業の展開と、完結に至る偉大な信仰の業を見ることとなる。牧師長老諸兄の、高邁な見識と行動性に敬服する。昭和二十七年に始まる麻生、厚別、真駒内の伝道所開設、さらに六十年北広島伝道所設立献堂に至る遠大な宣教の業である。

今、謙虚に思い巡らす時、この宣教の道を可能にした巨額の財源が、思い出の夏期学校の広い地所ほか長年に亘り母教団から贈られた、厚意と理解に依ることを知る。もとより秀逸な人材あってのことながら、貴重な財源なくしては達成不可能なことであったことは、肝に銘ずべきであろう。

敗戦後激しい競争社会の中、民族紛争動乱、災害被災や自然科学の進歩等、生活環境の変化を思う時、基督教伝道は戦前戦後を通じて、最も困難な時を迎えている。

この時わが教会の遠い源流を訪ね、先の諸先輩の偉大な信仰の業を思い、深浅を問わず各人の神学を培い、再び新たな温かい源流を、創出して行かなければならない。

全国民がザラ紙のものでもよい、一冊の聖書を携えて生きる日を夢見ながら。

『札幌教会の歩み―百年史以降』の発行を終えて

鈴木　重安

教会創立一二五年記念事業の一環として教会史の発行が企画され、編集委員の一人に任命されました。教会史の編纂とは重大過ぎる使命です。私ごときには余りにも重荷だと恐れをなして、ヨナさんのように逃げかかったのですが捉えられてしまいました。

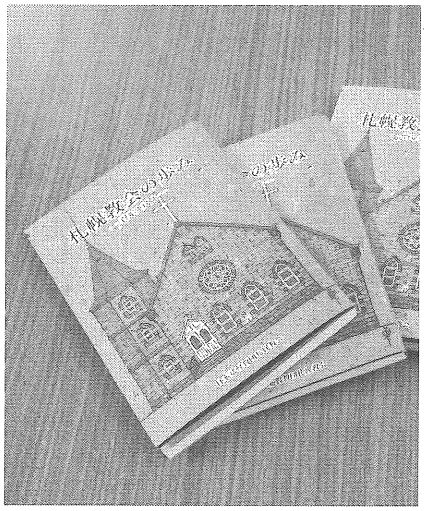
教会の史料として、先に一九九二年『札幌教会百年の歩み』が上梓されてから四半世紀を過ぎました。当時の編纂に携わった諸兄姉はすでになく、編纂の方法論も経験も申し送りも残されず、編集委員一同は全くのゼロから始めるしかないのです。

記念事業が行われた年のクリスマスには、完成して教会員の皆さんにお渡ししたいとの予定が遅れに遅れ、やっと二〇一五年のクリスマスにお渡しできましたが、これで終わった、ハイ安心！とはいきません。

次の教会史が編まれるとき、編集に携わる人たちがまたゼロからという事態がないように、マニュアルを書き残す仕事が残っています。簡単に言えば次の通りです。

一、体裁と構成はおおよそ前の百年記念史に倣い、まず仮目次を作ること
二、資料は教会総会資料、教会週報、各種刊行物ほか有用なものを集めること
三、文体、資料からの拾い方などをあらかじめ定め、記述の統一を図ること
四、元原稿の状態で十分に討議・検討して赤ペンを入れ、必要ならパソコンの打ち直しをし、完全原稿（初校、再校は文字の誤りを直す程度ですむ完成度が必要）の形で印刷会社に渡すこと

以上に留意するならば次世代の教会史編集は気軽に楽しく、よりよい本が作れるでしょう。その本を私は見られず残念ですが。



東日本大震災支援セール

片桐　文子

二月二十一日、婦人会例会後に婦人会主催で行われました。大震災から、ちょうど五年が過ぎようとしています。あの日のことは誰もが覚えておられることでしょう。今までに経験したことのない強い揺れが長く続き、大変なことが起きたと不安でいっぱいでした。放映される津波の様子に更なる恐怖や悲しみに震えと涙が止まりませんでした。時折報道される被災地の様子は、まだまだ復興には程遠い情景です。そして、災害で家族を失った方々の心の傷は癒されておりません。少しでも助けになるようにと、今回で九回目の支援セールでした。手芸品、手作りのお菓子や惣菜、食品や食器やアクセサリーなどたくさんの献品が寄せられ、収益は一一二、九〇五円でした。

全国教会婦人会連合東日本大震災義捐金、教団東北教区センター「エマオ」、福島伊達教会、二月に起きた台湾地震支援の為、それぞれ献金させて頂きます。皆さまのお働きに感謝いたします。

お帰りなさい　札幌教会へ

札幌に戻って

南　力
深冬

子どもの話し声が礼拝堂の中から聞こえて来た。ドアを開けて中に入ると教会学校が終わった直後のようだった。都市化が一層進み、住宅の少なくなった街の中心部での教会学校は存続できるのだろうかと心配していたのに、それは杞憂だった。十二年振りで母教会に戻り、八月三十日の最初の礼拝に出席したとき、おそらく教会創立以来持たれていたであろう教会学校が続いていたのだ。何と言う恵みか。少人数でも教会学校をこの後も続けなければと強く思わされた。

札幌教会に来始めたのは一九五〇年だった。まだ戦後の傷跡があちこちに残っており、日々の暮らしも決して楽ではなかった。しかし、若さゆえにそれらの苦難を乗り越え教会生活を楽しんでいた。受洗は一九五二年のイースターだったがこのとき十七人が一緒に受洗した。一九五五年ころまでに受洗した「入信同期生」とも言うべき人が今ほとんどいなくなってしまった。天に召されたり、他教会に転出したりだがこれは寂しいことだ。

宮城県にいるときはほとんど毎日車に乗っていた。札幌の長男は高齢での運転は危険だからやめろという。そして、われわれ二人が住む家を見つけてくれた。残りの日日を生まれ故郷で過ごすようにと、これは神様からのプレゼントと思い、感謝して過ごしたいと思っている。

御恩寵に感謝

野田　義成
純子

昨年十二月に転入会をお許しいただきました私共は、四十年前にも転入をお認めいただき、今回は二度目の転入会になります。神様のお計らいの不思議さと、そのお導きの尊さに感謝の思いを深くいたします。

一九七六年、それまで八年間お世話になりました道内の地方都市に在る日基の教会から転入させていただき、十年前に函館教会に転出いたします迄の三十年間を、主日礼拝を軸に大変豊かに過ごさせていただきました。二人の娘達も高校を卒業して札幌を離れます迄、教会学校で育てていただき、現在、それぞれに所属教会が与えられておりますことは大きな喜びであり、感謝です。

十年前に転出いたしました時には、再び札幌教会に戻らせていただく事になろうとは想像も及ばない事でしたが、神様の御憐れみと御恩寵に感謝しております。

札幌に戻りました直後から、予期しない病院との関係が深くなり、主日礼拝ごとに多くの方々にお声をかけていただき、ご心配を、そしてお祈りをいただきました。主に在るお交わりの豊かさに、改めて感謝の思いを深くいたしました。

歳を重ねて、なお、主日礼拝へのお招きを受け、新しい御言葉と、お祈りの課題も与えていただき、さらに、豊かなお交わりにも加えていただけます事、誠に有り難く、感謝の思いを深くしております。

どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

教会音楽会に思う

高杉　純二

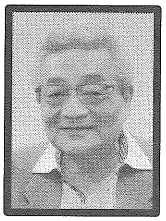
十一月十五日秋季特別伝道礼拝が行われた午後に、札幌教会礼拝堂にて第3回教会音楽会が行われました。今回も全て教会員による演奏と歌曲独唱の構成となりました。

礼拝を支えるオルガニスト全員が参加し、バッハを始めとするバロックからロマン派の教会音楽を演奏し、クリスマスに因んだ歌曲を福地悦子姉妹に歌ってもらいました。また会場にこられた方全員で讃美歌を4曲も歌いました。聴くだけの音楽会ではなく、皆で讃美する音楽会になったと思います。今年は福地さんの独唱の伴奏もオルガニストがピアノで行いました。その伴奏は歌い手を盛り上げるもので、感銘を与えました。毎年少しづつでも新しい試みを加えることで、この音楽会がより楽しく讃美を行う会に成長すると思います。その意味では今後には聖歌隊の参加も検討課題になるのではないでしょうか。

裏方としてパンフレットの作成や当日の運営に奉仕頂いた宣教委員の皆様にも感謝いたします。

追悼

西堀　眞 兄



2015年12月18日

西堀眞さんは釧路の出身です。ご両親が熱心なキリスト者で教団釧路教会員でした。

西堀兄が洗礼を決心したのは二〇一一年十二月二十四日に逝去された実兄光爾（こうじ）兄の病床洗礼がきっかけでした。ご自身もそのころ体調を崩し、先を見つめての願いでした。長年北電関係で、仕事人間であったようです。退職後に大病をされ、生活はお一人で大変であったようですが持ち前の明るさで周囲の人を和ませていました。

洗礼は受けましたが日曜日の礼拝にはお身体の加減で殆ど出席することはできませんでした。ただ毎月、不自由な体でタクシーを使って献金を届けておられました。印象的だったのはお兄さんを亡くした時、受洗を先に延ばされたらと勧めると「いいえ受けます」と翌日二十五日（日）クリスマスに受洗されました。そしてお兄さんと同じようにクリスマスの翌日葬式をいたしました。

教会Do！

聖歌隊のはたらき

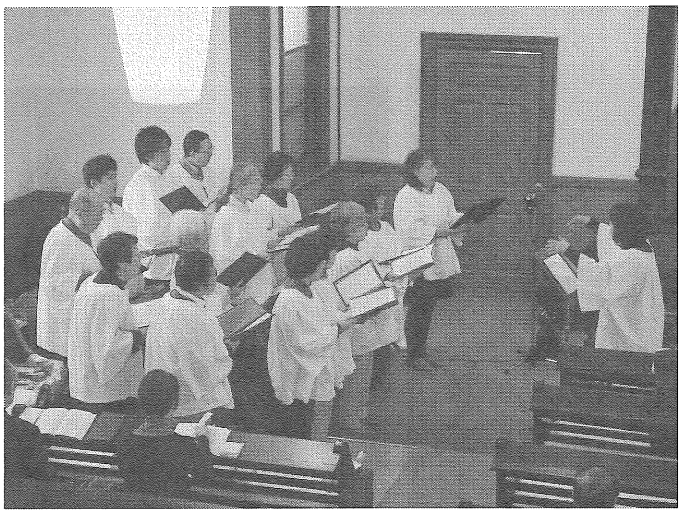
秋本　ゆか

イースターを迎え、主の復活を祝って、兄弟姉妹とともに「ハレルヤ！」と高らかに主を賛美することができる幸せに感謝いたします。

毎週の主日礼拝では五曲の讃美歌が歌われますが、礼拝堂が会衆一同の歌声で満ちる時、私は自分のひ弱な信仰が強められる気持ちになります。また、指揮者としてヘンデル作曲の「ハレルヤコーラス」を指揮している時にもその思いが一段と強くなります。皆さんの歌声が信仰に支えられて会堂で一つにまとまり天上の神へと届くと感じます。

現在、聖歌隊は、毎週の礼拝後、三十分から一時間ほど練習し、礼拝での奉唱に備えています。聖歌隊員もそれぞれに教会内での役割を抱えています。なかなか全員が揃って練習することができないのですが、歌い慣れた曲だけでなく、主日礼拝ではあまり歌われていない讃美歌にも積極的に取り組むように心がけています。

イースターまでのレント・受難節では主の十字架による深い愛を賛美しました。クリスマスには主の御降誕を祝って歌います。年二回の特別伝道礼拝では、神の栄光を伝える重要な役を担っていると感じています。また、これら教会暦にそった奉唱以外にも、毎年春に行われている「さっぽろ教会音楽祭」に参加する機会を得ています。様々な教派のキリスト者とともに祈り、平和の主、希望の主をたたえて賛美の声をあわせています。



私たち一人一人の賛美の声は小さくとも、全員が音を合わせて同じ旋律を奏でる美しさと力強さ、複数の声部（パート）で歌い合わせるハーモニーの美しさと音の広がりが、神をたたえる言葉とともに私たち聖歌隊と皆さんの信仰の広がりと強さになることを願って奉仕したいと思っています。

追悼のお知らせ

菊地とみ子姉が、二月十七日逝去されました。編集の都合に依り、今回記事を掲載できなかったことをお詫び致します。

編集後記

「主の復活ハレルヤ」！

戦後70年を越えた今も世界に絶えない戦禍。東日本大震災から5年、未だ復興が進まない被災地。頻発する自然災害。私たちは神様の救いが地球上すべてにもたらされることを信じ、祈りを共有する人が世界の教会に在ることに励まされます。甦りの主と共に新たな一歩を歩み始めましょう。（M）